〈新　刊　紹　介〉

（価格は税込定価）

田島毓堂著『正法眼蔵の国語学的研究　魁冊』

本書は仏教思想書『正法眼蔵』を国語学的観点から緻密に記述し，研究したものである。前後編からなり，前編は昭和38年1月に名古屋大学文学部に提出された卒業論文『正法眼蔵の国語学考察』本編，後編は昭和40年1月に名古屋大学大学院文学研究科に提出された修士論文『正法眼蔵の国語学的研究』の本編を翻刻したもので，昭和52年に出版された田島毓堂『正法眼蔵の国語学的研究』（笠間書院）へと連なる論考である。本書の構成は次のとおりである。「前編」は，「はしがき」「凡例」に続き「第1章　序説—資料概観」「第2章　表記法について」「第3章　音韻」「第4章　語法」「第5章　語彙」「あとがき」からなる。「後編」は，「凡例」「序」「第1章　資料概観」「第2章　表記法について」「第3章　音韻」「第4章　語法」「第5章　文論（1）表現類型」「第6章　文論（2）文の構成」「第7章　語彙」「第8章　字音語」「あとがき」からなる。巻末に「写真所在・目録」「付表目録」「主要語句索引」「魁冊あとがき」を付す。（遠藤佳那子）

（2021年1月26日発行　右文書院刊　A5判縦組み　695頁　定価16,500円　ISBN 978-4-8421-0812-4）

窪薗晴夫・野田尚史・プラシャント パルデシ・松本曜編『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』

本書は，2016年から開始された国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の研究成果をまとめた論文集である。個別言語としての日本語研究と，世界の言語を対象とした一般言語学・言語類型論との架け橋となることをめざし多角的に論じられた書である。

本書の構成は，「まえがき」に続き「第Ⅰ部　日本語と言語類型論」には，「第1章　日本語のアクセントと言語類型論（窪薗晴夫）」，「第2章　日本語諸方言のイントネーションと言語類型論（五十嵐陽介）」，「第3章　日本語のオノマトペと言語類型論（秋田喜美）」，「第4章　日本語の文の主題と言語類型論（野田尚史）」，「第5章　日本語のとりたて表現と言語類型論（井戸美里）」，「第6章　日本語の語順と言語類型論（山本秀樹）」，「第7章　日本語の有対動詞と言語類型論（プラシャント パルデシ）」，「第8章　複数局面を含む移動事象表現と言語類型論—日本語と他言語の比較（松本曜・鈴木唯・高橋舜・谷川みずき・長屋尚典・吉成祐子）」。「第Ⅱ部　言語理論と言語類型論」には，「第9章　最適性理論と言語類型論（田中　雄）」，「第10章　生成文法と言語類型論（岸本秀樹）」，「第11章　計算言語学と言語類型論（窪田悠介）」，「第12章　認知言語学と言語

類型論（守田貴弘）」。末尾に「索引」，「執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）

（2021 年 2 月 22 日発行　開拓社刊　A5 判横組み　328 頁　定価 4,400 円　ISBN 978-4-7589-2298-2）

田中寛著『日本語複文構文の機能論的研究』

本書は，現代日本語の複文構文のいくつかの現象，構造を対象に，その発話意図と文の展開性を考察するものである。同時に，複文が生起する環境，そこに介在する主意性についても視野に入れて論ずる。本書は，ひつじ研究叢書〈言語編〉第 177 巻として刊行された。

4 部構成となっている。まず，「まえがき」につづき，「序章　複文構文とその内包する言語事象――機能論的研究の立場から――」。「Ⅰ部　動詞接続辞の展開的機能をめぐって」には，「第 1 章　限定的評価判断表現の諸相――「 - だけに」，「 - だけあって」とその周辺――」，「第 2 章 「ある」の後置詞化と状況の指示的特性――「 - とあって」と「 - にあって」の意味と用法――」，「第 3 章　形式化のすすんだ動詞テ形接続辞の類型的研究 「 - をみすえて」などの用法を例に」。「Ⅱ　条件構文における主観性をめぐって」には，「第 4 章　条件性と状況・事態，観察，把握――ト条件構文の事象性，伝達性を中心に――」，「第 5 章　ナラ条件構文の特殊用法について――“前提”と“確認”の意味の交渉――」，「第 6 章　複合辞からみた条件構文の周辺 「 - だけで」，「 - しだい（で）」などを例に」，「第 7 章　特殊否定条件構文とその発話意図 「 - ないことには」などを例に」。「Ⅲ　展開構文における発話意図をめぐって」には，「第 8 章　状況・推移をあらわす「ナカ」の含意性――事態情報の導入的機能を中心に――」，「第 9 章　ヴォイスの中核とその周辺――文展開にかかわる情意性の観点から――」，「第 10 章　名詞述語文の発話意図をめぐって――時の“特化”をあらわす類型を中心に――」。「Ⅳ　比較，並列構文における意味的な拡張」には，「第 11 章　比較，対比をあらわす副詞・副詞節と発話意図――「まして」，「 - どころか」などを例に――」，「第 12 章　事態の対比と併存の表現をめぐって――“比較”と“特立”を中心に――」，「第 13 章　列挙，例示，無条件の意味構造――「 - であれ」，「 - といい」などを例に――」，「第 14 章　文展開における付加・累加表現の諸相――「 - はもとより」，「 - はおろか」などを例に――」。補論として，「文の通念と含意について――文の認識と認定をめぐる覚書――」，「日本語の反復・並列形式と強調の類型――語彙的反復と構文的反復の観点から――」。末尾に「参考文献」「あとがき」「索引」を付す。（椎名渉子）

（2021 年 2 月 22 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　定価 9,680 円　ISBN 978-4-82341-057-4）

山岡華菜子著『環大阪湾地域におけるアクセント変化の研究』

本書は，京阪式アクセントの諸地域のうち，とくに大阪湾周辺のアクセントについての実態と，京阪式アクセントの史的変遷とのかかわりを論じた書である。本書は，ひつじ研究叢書〈言語編〉第 180 巻として刊行された。

本書の構成は,「まえがき」,「序章　日本語のアクセントとアクセント史」,「Ⅰ　現代京阪式アクセントの変化と体系性」には「第1章　二拍名詞第4類と第5類の合同傾向」,「第2章　三拍形容詞の連用形アクセントの変化と体系性」。「Ⅱ　アクセント型の統合からみる京阪式アクセントの史的変化」には,「第3章　三拍名詞第2類・第4類のアクセント変化の方向」,「第4章　二拍・三拍動詞の禁止形アクセント」,「第5章　三拍動詞第2類のアクセント変化」。「Ⅲ　京阪式アクセントの変化と文法的事象」には,「第6章　一段動詞の五段化傾向とアクセント」,「第7章　形容詞型活用の付属語アクセント――推定〈ラシイ〉――」,「第8章　形容詞型活用の付属語アクセント――希望〈タイ〉――」,「第9章　動詞型活用の付属語アクセント」,「第10章　二拍助詞のアクセント――格助詞・接続助詞〈カラ〉――」。結論の章として「終章　京阪式アクセントの展開」。

末尾に「参考文献」,「初出一覧」,「あとがき」,「索引」を付す。(椎名渉子)

(2021年2月22日発行　ひつじ書房刊　A5判横組み　258頁　定価7,480円　ISBN 978-4-82341-063-5)

佐藤貴裕著『節用集史の諸問題』

本書は「節用集とは何か」について，背景にある社会情勢や，諸本の系統関係，節用集内部の言語情報など，多角的な視点から論じる。筆者による『節用集と近世出版』『近世節用集史の研究』を踏まえ，前2著に収録されなかった論考を編成したものである。

本書の構成は次のとおりである。「まえがき」に続き「第1部　序論」(「導論」「第1章　節用集の史的展開」「第2章　節用集史の後景」)「第2部　古本節用集」(「導論」「第1章　新出伊勢本節用集是心本の位置」「第2章　中核的印度本の特異付録」「第3章　五井守香と『和漢通用集』」)「第3部　易林本『節用集』平井版」(「導論」「第1章　平井版諸本の研究」「第2章　平井版匡郭考」)「第4部　近世前期二本――書法と検索法――」(「導論」「第1章『珠玉節用万代宝匣』」「第2章　『新増節用無量蔵』の意匠」)「第5部　『和漢音釈書言字考節用集』」(「導論」「第1章　東西方言対立語にみる資料性」「第2章　『大成無双節用集』への改編」「第3章　『いろは節用集大成』」「第4章　「意」字よりはじまる早引節用集二種」)「第6部　早引節用集」(「導論」「第1章　早引節用集の分類のために」「第2章　早引節用集の系統研究のために」「第3章　A類本文の派生関係」「第4章　B類本文の派生関係」「第5章　B類増補本文の派生関係」)以上6部からなる。巻末に「参考文献」「あとがき」「主要事項索引」を付す。(遠藤佳那子)

(2021年2月25日発行　汲古書院刊　A5判縦組み　375頁　定価10,450円　ISBN 978-4-7629-3650-0)

金澤裕之・川端元子・森篤嗣著『日本語の乱れか変化か――これまでの日本語，これからの日本語――』

本書は,「誤用」「ゆれ」「新語」などとして注目される語句の形態，用法，語句，音声の現象に焦点を当て，軽視されがちなこうした言語現象に潜む本質に迫り，日本語学

の射程を広げることを目的とした研究論文集である。

構成は，「はじめに」に続き，「Ⅰ　一般的なルールから見た変化」には，「若者の言葉から見た日本語の未来（金澤裕之）」，「授受表現の文法的逸脱表現（山田敏弘）」，「音声における逸脱（尾崎喜光）」。「Ⅱ　現実の言語現象から見た変化」には，「J ポップの歌詞に見られる逸脱表現（野田春美）」，「大学生の文章に見られる逸脱表現（川端元子）」，「商品名に見る新たな表現の産出と定着（簑川惠理子）」。「Ⅲ　新語や慣用表現から見た変化」には，「新語の定義とその条件（橋本行洋）」，「外来語の氾濫・乱用と叙述語化（金　愛蘭）」，「「爪痕を残す」の「新用法」から考える慣用的な表現の逸脱（岡田祥平）。「Ⅳ　教育や社会の面から見た変化」には，「書き言葉におけるテル縮約形と日本語教育（森　篤嗣）」，「国会集団語の誕生・発達過程に見る逸脱現象（松田謙次郎）」，「言語変化と社会環境（横山詔一）」。末尾に「あとがき」，「執筆者紹介」が付く。（椎名渉子）

（2021 年 2 月 26 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　272 頁　定価 4,180 円　ISBN 978-4-82341-037-6）

安部清哉編著『明治初期理科教科書の近代漢語――中川重麗『博物学階梯』にみる実態［影印・翻刻・索引付］――』

本書は，近代日本語の確立過程における重要性，また翻訳語資料としての価値から，理科教科書である中川重麗編纂『博物学階梯』を取り上げ，文献研究と語彙調査を行い，近代漢語の成立を探るものである。資料編として影印，翻刻，索引が付され，近代漢語の資料としても有用である。

本書は二部からなり，「第Ⅰ部　中川重麗『小学読本　博物学階梯』諸本と近代漢語」の構成は次のとおりである。「第 1 章　はじめに――近代日本語と漢語――（安部清哉）」「第 2 章　中川重麗『博物学階梯』シリーズ 6 冊と近代日本語（安部清哉）」「第 3 章　明治理科教科書執筆者としての「中川重麗」事績（明治 20 年まで）（渡辺陽子・安部清哉）」「第 4 章　中川重麗『博物学階梯』の諸本と構成（読本・教授本・字解）（蓮井理恵・安部清哉）」「第 5 章　シュドレル“Das Buch der Natur”と中川重麗『博物学階梯』の図の関係（蓮井理恵）」「第 6 章　『博物学階梯』および中川重麗論文「唯物論一斑」の近代漢語（蓮井理恵・安部清哉）」「第 7 章　『博物学階梯』明治 10 年版と明治 12 年版の漢語比較（漢語異同語彙比較表）（安部清哉）」「第 8 章　『改正増補　博物学階梯教授本』（明治 13 年）の語彙――中川重麗の語彙習得――（伊藤真梨子）」「第 9 章　翻訳漢語「機力」と“mechanical power”――現代語に専門用語として残る近代理科教科書語彙――（伊藤真梨子）」「第 10 章　漢語語基の近代的変質（安部清哉）」。第 1 部末尾に「参考文献（関連文献）一覧」「人名索引」「書名索引」「語句索引」を付す。

「第Ⅱ部　資料編　『小学読本　博物学階梯』『小学読本　博物学階梯字引』［影印・翻刻・索引］」の構成は次のとおりである。「第 1 章　『博物学階梯』（明治 10 年）漢語・外来語索引（安部清哉・伊藤真梨子）」「第 2 章　『博物学階梯』（明治 10 年）巻末語彙表索引

（安部清哉）」「第 3 章　『博物学階梯字引』（明治 11 年）語彙索引（安部清哉）」「第 4 章　『博物学階梯』（明治 10 年）翻刻（安部清哉（伊藤真梨子・蓮井理恵・渡辺陽子協力））」「第 5 章『博物学階梯』（明治 10 年）影印（安部清哉架蔵）」「第 6 章　『博物学階梯字引』（明治 11 年）影印・翻刻（安部清哉）」。巻末に「あとがき」「執筆者紹介」を付す。（遠藤佳那子）

（2021 年 2 月 28 日発行　花鳥社刊　A5 判横組み　397 頁　定価 8,250 円　ISBN 978-4-909832-35-1）

益岡隆監修　定延利之・高山善行・井上優編『時間と言語――文法研究の新たな可能性を求めて――』

本書は，これまでの研究成果を踏まえながら，従来のテンス・アスペクト研究よりさらに広い視点から時間表現に迫ろうとするものである。多角的アプローチのもと，談話やテクストといった広義のコンテクストにおける時間表現を捉える。そのために研究分野の横断・縦断をめざしたプロジェクト方式による取り組みを掲げ，現代語研究班，歴史研究班，対照研究班の 3 つの班から構成されている。

第 1 部「現代語研究」には，「パーフェクトらしく見える 3 つの「た」の過去性（定延利之）」，「「た」形変化文を発する権利のありか（羅希・定延利之）」，「逸脱としての動作と変化（羅希・定延利之）」，「「タ形」の意味をめぐる議論を日本語教育から考える（小林ミナ）」。第 2 部「歴史的研究」には，「歌物語テクストと時間表現　枠構造論の再検討（高山善行）」，「平安和文の長編物語の「枠構造」を考える――『源氏物語』を資料として――（西田隆政）」，「『伊曽保物語』の助動詞と枠構造――ナラトロジーから見た解釈――（藤井俊博）」，「明治期小説の語り方　文末形式「た」に着目して（石出靖雄）」。第 3 部「対照研究」には，「日英語の三人称小説における時制形式選択とその関連現象――言語使用の三層モデルと C- 牽引に基づく分析――（和田尚明）」，「フランス語半過去形と叙想的時制・叙想的アスペクト（渡邊淳也）」，「話し手の気持ちとアスペクト形式の選択――日本語と中国語の場合――（井上優）」，「金善美「推量・意志を表す韓国語の -keyss-，（-u）l kes i- の出現様相――指示詞との関連――（金善美）」。末尾に「執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）

（2021 年 2 月 26 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　352 頁　定価 6,820 円　ISBN 978-4-89476-992-2）

葛西太一著『日本書紀段階編修論――文体・注記・語法からみた多様性と多層性――』

本書は日本書紀について，古訓や古注釈によってこれまで導出されてきた解釈を見直し，記述方式に着目し文体的特徴を分析することによって，実証的読解のための枠組みを構築することを目的とする。

本書の構成は次のとおりである。「第 1 章　文体・句読の差異からみた日本書紀」（「第 1 節〈句頭辞〉の使用」「第 2 節〈句末辞〉の使用」「第 3 節〈同字数句〉の連接」「第 4 節　日本書紀区分論続貂」），「第 2 章　注記・表現の重複からみた日本書紀」（「第 1 節　神武紀冒頭部の位置付け」「第 2 節　神武東征と二つの詔」「第 3 節　日本武尊関係記事の構句と表現」「第

4節「頼」字の古訓と解釈」「第5節　訓注と被訓注語の係り受け」),「第3章　語法・表記の揺らぎからみた日本書紀」(「第1節　序数詞「迴」の周辺」「第2節　語りの方法とその定形化」「第3節　壬申紀「虎着翼放之」の解釈」「第4節　上代文献における「河上」「川上」の語義と表記」「第5節　景行紀と豊後国風土記の漢語表現」),「終章　日本書紀段階編修論」。巻末に「初出一覧」「あとがき」「索引」を付す。

なお本書は，2018年度に上智大学に提出した博士学位請求論文「日本書紀段階成立論――文体・語法・注記から見た編纂過程の研究――」に基づき，加筆修正を行ったものである。(遠藤佳那子)

(2021年2月28日発行　花鳥社刊　A5判縦組み　359頁　定価11,000円　ISBN 978-4-909832-32-0)

庵功雄・田川拓海著『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す　第2巻――「した」「している」の世界――』

本書は，第1巻につづきさまざまな立場からのテンス・アスペクト研究の前線と今後の展望を示す書であり，そのなかでも「した，している」を対象に形態論・形式意味論などを含むテンス・アスペクトに対するさまざまなとらえ方を提示する。

本書の構成は,「シリーズ刊行のことば」,「第2巻『「した」「している」の世界』序論」につづき,「形態論・活用論から見る「した」(田川拓海)」,「時制形式の有無と副詞節のタイプ(有田節子)」,「現代日本語のテンス・アスペクト体系におけるテンス表示部の機能について(庵　功雄)」,「染み込み速度と「た」――さまざまな現象の中で――(定延利之)」,「現代日本語の「した」の成立過程(高山善行)」,「東北方言から見る「した」とムード(高田祥司)」,「英語の「した」(和田尚明)」,「日・英語物語談話における時制形選択(奥川育子)」,「テイルの1つの意味(岩本遠億)」,「体感度の高さに動機づけられる「て(い)る」「た」に関する覚え書き―世界モデルへの潤色を通して(定延利之)」,「無標の否定形式としてのシテイナイ(松田真希子・庵　功雄)」,「現代日本語のムードを表す形式についての一考察(庵　功雄)」,「アスペクト研究における形式と意味の関係の記述方法を問い直す――テイルの発達を踏まえて――(福嶋健伸)」。末尾に,「索引」と「執筆者紹介」を付す。(椎名渉子)

(2021年3月15日発行　ひつじ書房刊　A5判横組み　332頁　定価4,620円　ISBN 978-4-89476-782-9)

筑紫日本語研究会編『筑紫語学論叢 III――日本語の構造と変化――』

本書は筑紫日本語研究会(前身は筑紫国語学談話会)が40周年を迎えることを記念して編まれた論文集である。日本語の歴史的研究や方言研究などを中心に，全21編の論文からなる。

構成は以下のとおりである。「日本語使役文の用法と歴史的変化(青木博史)」「終助詞「なむ」小考(森脇茂秀)」「中古散文における「連体形＋ゾ」文の用法――ノダ文・連体ナリ

文との共通点と相違点――（勝又隆）」「『上井覚兼日記』における「被賜・被給」をめぐって（堀畑正臣）」「中世室町期の注釈書における「～トナリ」の用法（山本佐知子）」「洒落本における不定の「ぞ」「やら」「か」（川瀬卓）」「ソコソコの語史（清田朗裕）」「「ワル（悪）＋形容詞」の消長――形容詞語形成の観点から――（村山実和子）」「愛媛県宇和島市三間町毛利家の角筆文献と漢詩学習――写本「三體詩　中」を資料として――（西村浩子）」「昭和初期，福岡県直方の方言矯正書二種（岡島昭浩）」「北琉球語喜界島方言の授与動詞（荻野知砂子）」「佐賀東部方言の条件節における準体形式「ト」の挿入――時制節性からみた条件表現の体系についての一考察――（有田節子）」「九州方言の動詞タ形・テ形に起こる音便現象の対応関係：予備的考察（有元光彦）」「天草諸方言における音調型と複合名詞アクセントの中和（松浦年男）」「出雲方言アクセントの分布と歴史――2拍名詞4類と5類のアクセントをめぐって――（平子達也）」「ロシア資料と上代特殊仮名遣エ列音――下二段動詞の場合――（江口泰生）」「鹿児島方言における対格標示の条件――ロシア資料と近代談話の比較から――（久保薗愛）」「長崎方言の終助詞バイの変遷について――近世近代の長崎史料を中心に――（前田桂子）」「大正10年『読売新聞』の日本語関連記事について――「新聞記事データベース」活用の一例として――（新野直哉）」「連体修飾節と被修飾名詞の関係――スケールを表す被修飾名詞に着目して――（東寺祐亮）」「間接疑問文発達の一過程――日本語史を中心に――（衣畑智秀）」。巻末に「あとがき」を付す。（遠藤佳那子）

（2021年3月15日発行　風間書房刊　A5判縦組み　513頁　定価14,300円　ISBN 978-4-7599-2373-5）

朴天弘著『現代日本語の「ハズダ」の研究』

現代日本語の文末に現れる「ハズダ」について，従来は用法分類が主に行われてきた。それに対し本書は，様々な用法を網羅的・統一的に説明することによって「ハズダ」の基本的な意味・機能を明らかにし，「ハズダ」の全体像を1つの機能「知識確認」から説明できることを示す。「2020年度東京大学学術成果刊行助成制度」による刊行助成を受けて刊行された。

本書の構成は次のとおりである。「Ⅰ　従来の「ハズダ」における説明　その可能性と限界」（「第1章　序論」「第2章　「ハズダ」の基本的な理解」「第3章　「ハズダ」と研究方法」），「Ⅱ　新たな説明の提案　知識確認形式として」（「第4章　推論を伴う知識確認形式の「ハズダ」」「第5章　推論を伴わない知識確認形式の「ハズダ」」「第6章　知識確認から派生へ」「第7章　「ハズダ」と他の形式との比較―その1」「第8章　「ハズダ」と他の形式との比較―その2」「第9章　まとめ」）。巻末に「あとがき」「参考文献」「用例出典」「索引」を付す。

なお本書は，2018年6月に東京大学に提出した博士論文「現代日本語の「ハズダ」に関する考察――「知識確認形式」という観点から――」に加筆・修正を行ったものである。（遠藤佳那子）

（2021 年 3 月 19 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　287 頁　定価 7,370 円　ISBN 978-4-8234-1083-3）

三好伸芳著『述語と名詞句の相互関係から見た日本語連体修飾構造』

本書では，述語と名詞句の分析を通じて日本語連体修飾構造の研究の新たな側面を見出すことをめざし，同時に，連体修飾構造を通じてみた文（叙述）の意味分析に迫ろうとする。筆者が 2017 年に筑波大学大学院に提出した博士学位論文「日本語における連体修飾構造と名詞句の内容性に関する研究」に加筆修正を行い，ひつじ研究叢書〈言語編〉第 181 巻として刊行した書である。

構成は次のとおりである。「まえがき」「凡例」につづき，「第 1 章　序論」，「第 2 章　先行研究および本書の枠組み」，「第 3 章　述語の内包性」，「第 4 章　可能世界における属性を問題とする述語」，「第 5 章　時間領域における属性を問題とする述語」，「第 6 章　名詞句の指示性」，「第 7 章　コピュラ文と連体修飾構造」，「第 8 章　存在文と連体修飾構造」，「第 9 章　結論」。末尾に，「参考文献」「あとがき」「索引」を付す。また，「まえがき」には，本書と既発表論文との対応がしめされている。

なお，本書は，JSPS 科研費による若手研究「現代日本語における述語と補部の相互作用に関する研究」（課題番号 19K13155）の助成を受けている。出版に際しては筆者が所属する実践女子大学から「2020 年度実践女子学園学術・教育研究図書出版助成」の支援を受けている。（椎名渉子）

（2021 年 3 月 19 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　294 頁　定価 7,700 円　ISBN 978-4-82341-064-2）

小林隆編『全国調査による言語行動の方言学』

本書は，言語行動が全国的視野からどういった地域類型に分かれるかについて，全国調査のデータをもとに把握しようとする書である。言語行動の方言学の専門書であるという点，また，全国約 800 地点から収集したデータを言語行動の目的別に考察しているという点でも新しい視点をもつ書といえる。

本書の構成は次のとおりである。「まえがき」，「Ⅰ概説編」には「言語行動の全国調査（小林隆）」。「Ⅱ　分析編」については「依頼・受託の言語行動――配慮性と主観性の観点から――（小林隆）」，「買い物場面における言語行動の地域差――レジでの声かけ・少額の会計への高額紙幣支払い――（篠崎晃一）」，「はがきを買うときの言語行動――頼む・礼を言う――（井上文子）」，「「申し出る」と「受け入れる」――恩恵表現と機能的要素から見る分布の特徴――（松田美香）」，「勧めの言語表現にみる地域差（竹田晃子）」，「おつりが足りないとき，何と言うか――近畿の言語行動についての仮説――（熊谷智子）」，「不利益を被る場面における非難の言語行動の地域差――東北と近畿に注目して――（椎名渉子）」，「相手に寄り添う言語態度――のど自慢をめぐる言語行動の地域差を追う――（津田智史）」，「喜び・落胆の地域傾向（佐藤亜実）」，「連絡を伝える言語行動の地域差――話し手と聞き手の関係性に注目して――（櫛引祐希子）」，「忘れ物を注意

する場面における言語行動と言語表現（尾崎喜光）」，「新年のあいさつ・不祝儀のあいさつの定型性（中西太郎）」。「Ⅲ　総合編」として「言語行動の地理的傾向――本書のまとめとして――（小林隆）」。末尾に，「索引」，「執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）

（2021 年 3 月 26 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　356 頁　定価 5,500 円　ISBN 978-4-82341-071-0）

加藤重広・岡墻裕剛編『日本語文字論の挑戦――表記・文字・文献を考えるための 17 章――』

言語学において文字言語は副次的な位置付けをされ，日本語研究においても「文字論」について統一された研究像がない一方で，日本人にとって「文字」は意思疎通のための情報ツール，文化を伝達・共有するための媒介など，複数の役割を持つ重要な存在である。本書は，「文字」をどのように論じるべきか模索し，独立した「文字論」を目指す。

本書は 4 部 17 編の論文からなる。「第 1 部　言葉をどう書くか」に「日本語の表記システムとその特徴（加藤重広）」「近・現代小説の片仮名の用法一斑（金水敏）」「古代中国語における漢字の表語現象の諸相（松江崇）」「平安時代の真仮名（乾善彦）」，「第 2 部　文献をどう読むか」に「訓点研究「超」入門（小助川貞次）」「篆隷万象名義における漢文節の意味注記について（李媛）」「図書寮本『類聚名義抄』における掲出語と注文の対応について（申雄哲）」「辞書と文献の比較に基づく定訓論の再検討（白井純）」「明治期における基本漢字文献の諸相（岡墻裕剛）」，「第 3 部　文字をどう学ぶか」に「『文選』の学習（渡辺さゆり）」「学びの系譜とその豊饒（萩原義雄）」「変体仮名を学ぶ小学生（岡田一祐）」「米国陸海軍日本語学校の漢字教材“kanji Book”（高田智和）」，「第 4 部　文化をどう残すか」に「京都の「天橋立」を表す日本製漢字の展開と背景（笹原宏之）」「「蝦夷記」のアイヌ語申渡文における仮名の用法（佐藤知己）」「JIS 仮名と Unicode 仮名をめぐるいくつかの問題（當山日出夫）」「漢字字体研究と日本古辞書データベースの構築（池田証壽）」，以上を収録する。巻末に「あとがき」「執筆者一覧」を付す。（遠藤佳那子）

（2021 年 3 月 30 日発行　勉誠出版刊　A5 判横組み　416 頁　定価 7,700 円　ISBN 978-4-585-38000-9）

髙﨑みどり著『テクスト語彙論――テクストの中でみることばのふるまいの実際――』

本書は，語彙の面からテクスト分析にアプローチしたものであり，ひつじ研究叢書〈言語編〉第 175 巻として刊行された。テクスト語彙論とは，語彙・文法・文字・表記などの実際的な使用の場・発現の場であるテクストと，多様な言語事象とをむすびつける考え方である。

本書の構成は次のとおりである。「はじめに」につづき，「第 1 章　テクスト中の語の，テクスト構成語としてのふるまい」には，「1. テクストの中の語とは？」，「2. 語の“テクスト構成機能”について」，「3. 第 1 章のまとめ」。「第 2 章　テクストの中の語の機能語としてのふるまい――指示語および“指示語句”の働きを中心に――」には，「1. テクスト構成を援助する指示語の働き」，「2. 「臨時一語」との関係について」，「3. 指示語に伴う

テクスト構成語について」,「4.「指示語句」のまとめ」,「5. 学術入門書テクストを使った検証」,「6. テクストの中のコ・ソ・ア・ドのふるまい」,「7. 第2章のまとめ」。「第3章 テクストの中の語の，内容語としてのふるまい――反復し，臨時的に関連し合う語同士の結束性――」には,「1. テクスト中の語句の反復と関連」,「2. 指示語の援助をうけてテクスト構成に働く内容語」,「3. 学術入門書テクストでの検証」,「4. そのほかのテクストにおける語の反復・関連について」,「5. 内容語を表記する文字のふるまい」,「6. 第3章のまとめ」。「第4章 まとめ 今後の課題」。末尾に,「文献」「あとがき」「索引」を付す。(椎名渉子)

(2021年3月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 248頁 定価5,280円 ISBN 978-4-82341-054-3)

高山善行著『日本語文法史の視界――継承と発展をめざして――』

本書は日本古代語を研究対象として，現況における日本語文法史の研究領域を見通し，その拡張の可能性について考えるものである。拡張の方法として，既製の枠組みのなかで研究領域を伸展させる方法，手つかずの領域を開拓する方法，そして異なる2領域を接続させる方法，以上の3つを提案している。

本書の構成は次のとおりである。「はじめに」に続き3部からなり,「I 研究領域の伸展」(「第1章 モダリティ研究の展開」「第2章 疑問文研究の新視点」)「II 研究領域の開拓」(「第3章 名詞句研究の可能性」「第4章 配慮表現史の構想」)「III 研究領域の接続」(「第5章 モダリティ研究との接続」「第6章 テンス・アスペクト研究との接続」)。巻末に「あとがき」「既発表論文との関係」「使用テキスト」「参照文献」「索引」を付す。(遠藤佳那子)

(2021年3月31日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 286頁 定価7,040円 ISBN 978-4-8234-1008-6)

中俣尚己著『「中納言」を活用したコーパス日本語研究入門』

本書は，国立国語研究所のコーパス検索アプリケーション「中納言」コーパスの使用方法とそれを用いた研究の視点について多くの事例をもとに解説した入門書である。卒業論文執筆をめざす学生にコーパスを用いた言語の研究の技術的側面に加え，その魅力についてもわかりやすくまとめられている。

本書の構成は,「まえがき」のあと「第1部 検索してみよう」には,「第1章 コーパスとは？中納言とは？」,「第2章 中納言の検索単位」,「第3章 基礎的な検索」,「第4章 第4章 中納言の検索条件」,「第5章 応用的な検索」。「第2部 データを処理してみよう」には,「第6章 第6章 頻度表を作る」,「第7章 特定の表現を抽出する」,「第8章 レジスターの比較」。「第3部 研究してみよう」には,「第9章 初級文法項目のコロストラクション研究――「てある」を例に」,「第10章 中上級文法項目のコロストラクション研究――「～としても」と「～にしても」を例に」,「第11章 学生の卒業研究から――形容

詞＋「思う」と形容詞＋「感じる」」,「第 12 章　学生の授業レポートから――類義語の研究」,「第 13 章　中納言で検索できるいろいろなコーパス」,「第 14 章　レポート・論文を書く時の注意点」。末尾に,「参考文献」,「あとがき」,「索引」を付す。（椎名渉子）

（2021 年 4 月 30 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　208 頁　定価 1,980 円　ISBN 978-4-8234-1059-8）

今野真二著『テキストの変容――動態としてのテキスト――』

本書は，テキストが「書き手」や様々な事柄によって変容していくことについて，明治から昭和にかけて成立したテキストに注目し，言語的な観点から分析・考察を行うものである。採りあげたテキストはあえて通時的には配列せず，明治から昭和をひとつの共時態としてとらえ，諸種の言語現象を観察する。

本書の構成は次のとおりである。「序章　動態としてのテキスト」「第 1 章　夏目漱石「道草」」「第 2 章　岸田國士「双面神」」「第 3 章　島崎藤村「春を待ちつつ」」「第 4 章　改作によるテキストの変容　齋藤茂吉のテキスト」「第 5 章　森鷗外「文づかひ」」「第 6 章　江戸川乱歩の諸テキスト」「第 7 章　文庫本というテキスト」。巻末に「あとがき」「索引」を付す。（遠藤佳那子）

（2021 年 5 月 7 日発行　武蔵野書院刊　A5 判縦組み　516 頁　定価 12,650 円　ISBN 978-4-8386-0748-8）

平野尊識著『連濁の規則性をもとめて』

本書は，世界の言語における複合語の構成をも概観し，複合語において連濁・非連濁が如何なる規則性によって生起するのか説明を試みたものである。

本書の構成は次のとおりである。「I　複合語の構造と連濁の生起」（「第 1 章　連濁について」「第 2 章　複合語の構造と連濁」「第 3 章　連濁の機能と複合語の派生」「第 4 章　前項と後項を結び付ける形態素」「第 5 章 「右枝条件」と「頭音法則」」「第 6 章　連合辞と連濁」「第 7 章　連濁する複合語と連濁しない複合語」「第 8 章　連濁化と非連濁化」），「II　連濁・非連濁規則と連濁の規則性」（「第 9 章　連濁の規則性と起源」「第 10 章　河川名と連濁」「第 11 章　連濁・非連濁に関わる条件」「第 12 章　連濁と非連濁：規則化の試み」）。巻末に「参考文献」「索引」を付す。（遠藤佳那子）

（2021 年 5 月 20 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　198 頁　定価 5,280 円　ISBN 978-4-8234-1019-2）

野田尚史・小田勝編『日本語の歴史的対照文法』

本書は，互いの系統関係を考慮しない対照研究の手法を用いて，複数の異なる時代の日本語を対照させ，それぞれの時代の日本語の文法をより明確に記述することを目的とする。NINJAL シンポジウム「日本語文法研究のフロンティア――文法史研究・通時的対照研究を中心に――」（2019 年 1 月 13 日，国立国語研究所），日本語学会 2019 年度春季大会シンポジウム「現代語―古代語　対照文法の可能性と課題」（2019 年 5 月 19 日，甲南大学）を

きっかけとして編まれた論文集である。

本書は「本書の目的と概要」に続いて全6分野13編の論文からなり，「第1部　対照文法の課題と方法」に「日本語の歴史的対照文法の成果と課題（小田勝）」「対照文法の領分（大木一夫）」，「第2部　述語の対照文法」に「「可能」と「自発」の歴史的対照――「る・らる」と「可能動詞・られる」――（吉田永弘）」「連体「なり」」の機能をどう捉えるか――「のだ」との用法比較を通して――（高山善行）」，「第3部　連体・連用の対照文法」に「副助詞のノ連体用法の史的展開（宮地朝子）」「副詞から見た古代語と近代語（川瀬卓）」，「第4部　指示・情報の対照文法」に「日本語指示詞の指示の変容――聞き手の存在と結びついた「そ」――（藤本真理子）」「主語焦点構文における平安時代語と京都市方言の対照研究――古代語の文法にひそむ多様性を見出していくために――（竹内史郎）」「現代語と古代語の「係り結び」――焦点表示機能と主題表示機能を視野に入れて――（野田尚史）」，「第5部　疑問・確認の対照文法」に「話し手の行為について問う文――疑問文の歴史的対照の試み――（林淳子）」「確認の終助詞の歴史的対照――現代語の「ね」と中古和文の「な」――（富岡宏太）」，「第6部　丁寧語の対照文法」に「現代日本語の「です・ます」と中世前期日本語の「候ふ」の異なり――「丁寧語不使用」の観点から――（福嶋健伸）」「近世後期洒落本の丁寧語の運用――現代の談話資料との対照――（森勇太）」を収録する。巻末に「索引」「執筆者紹介」を付す。（遠藤佳那子）

（2021年6月10日発行　和泉書院刊　A5判横組み　294頁　定価6,600円　ISBN 978-4-7576-1000-2）

岩男考哲・坂本智香・建石始・益岡隆志・松瀬育子・眞野美穂著『名詞研究のこれまでとこれから』

本書は，名詞研究の切り口や可能性を提示し，新たな研究分野の開拓と活性化を図ろうとする書である。2016年11月に刊行された『名詞類の文法』（福田嘉一郎・建石　始編，くろしお出版）に携わった6名により企画・執筆された。各章のテーマにおいて，それぞれ研究動向と研究論文が掲げられている。

本書の構成は，「まえがき」「導入」に続き，「第1章　コーパスを利用した限定表現のコロケーション研究（建石始）」，「第2章　助数詞と名詞のつながり（眞野美穂）」，「第3章　名詞と引用形式の接点に生じる諸現象（岩男考哲）」，「第4章　名詞化辞の用法の対照（松瀬育子）」，「第5章　叙述の類型と名詞文（益岡隆志）」，「第6章　名詞述語文の研究史に関する一考察（坂本智香）」末尾に「あとがき」，「執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）

（2021年6月28日発行　くろしお出版刊　A5判横組み　264頁　定価3,740円　ISBN 978-4-87424-865-2）